

皆の広場
素人の古代史考⑧「東北古代・中世史」 自文科 永野 徹

東北古代史（目次）

- (1)東北古代史総論
- (2)東北の古代
- (3)律令時代の東北
- (4)街道をゆく要約版(司馬遼太郎著)

(1)東北古代史概論

(1) はじめに

- 地形** 東北の奥羽山脈が北に尽きる東側が下北半島、反対の西側は津軽半島。下北は三方が海で東が太平洋、北は津軽海峡、西は内海で中に陸奥湾。津軽氏の津軽半島と南部氏の下北半島では人情は大きく異なる。
- 国名称** 東北と言う名称の起源は、古代において畿内から始まる東海道、東山道の両方の道の奥にある事から「みちのおく」「みちのく」とされ南東北に道奥国(みちのおくのくに)が設置された。その後陸奥国と出羽国が設置され両者から一文字ずつ取って「奥羽」「奥羽両国」「奥羽州」などと呼ばれた。更に、もっと短縮して、単に「奥州(おうしゅう)」とも呼ばれた。また東北と言う名称は江戸時代・天保期の幕末になってから文献に現われる。公的な資料としては、慶応4年(18568)に内勅で秋田佐竹藩主に東北と下賜されたのが最初。五畿七道の東北3道(東海道と下賜されたのが最初。五畿七道の東北3道(東海道・東山道・北陸道)、即ち畿内天皇の在所から見て東・北東にあるすべての地域を指していたようだが、単純に「東国」と「北陸」の合成語(東北)とも考えられる。
- 現在の東北地方は一般的に青森県、岩手県、宮城県、秋田県、山形県、福島県の6県を指す。これら6県の面積は本州の約3割と言う広さである。但し、天気用語では日本を14地域区分に区分し新潟県を加えた7県を指す。
- 古代の東北地方は、多賀城が設置されて畿内政権の勢力が及んだ南東北と畿内政権の影響力が弱い北東北の南北に2区分される場合と奥羽山脈で区切られた陸奥国(内陸国・政治勢力範囲)と出羽国(沿岸国・商業勢力範囲)の東西2区分される場合がある。即ち、陸奥国の国府は仙台平野の多賀城に、出羽国の国府は庄内平野の酒田に置かれていた。また気候的には「太平洋側」と「日本海側」に単純に区分される事も多い。
- 記紀に登場する東北は古墳時代以降で蝦夷＝肅慎(シハセ)と呼ぶ。古代、現代の福島・宮城・岩手・青森の4県を纏めて陸奥(むつ)と呼んだ。明治維新で太政官令(1868)により東北は磐城、岩代、陸前、陸中、陸奥の5か国となり、陸奥は今の青森県一つに狭まった。明治4年に、陸奥は津軽藩と南部藩と下北半島の3地域から成る現在の青森県域となった。陸奥は当初は「道奥国(みちのおくのくに)」と表記されていた。7世紀半ばの大化の改新で「道奥(みちおく)」と変更になったが大宝律令で「陸奥」となる。東北と一口に言っても、日本海寄りの「津軽地方」と「南部」と呼ばれる太平洋側で大きく人情、風習が異なる。北海道から東北に駆けては大陸の靺鞨族(まっかつ)の渡来・文化的影響があったと言われる。東北と言えば長い間蝦夷の地として大和朝廷の支配が及んでいなかった鎌倉幕府が、東北に進出する前は土着民のアイヌ人によりアイヌ文化が形成されていたと言われる。アイヌ以前はオホーツク人(肅慎など)が居住していた。
- (東北人材): 原敬(政治家)、米内光政(軍人)、田中館愛橘(物理学者)
宮澤賢治(詩人)、金田一京助(言語学者)、内藤湖南(歴史家)
- (特産品): 南部鉄瓶、南部漆器、わんこそば、名馬山地
(観光名所) 十和田湖、弘前城は桜の名所、雪の八甲田山など。

(2) 縄文時代

東北縄文時代(10,000年～2000年前)＝新石器時代。日本の新石器時代は縄文時代と言われ、土器の製作が始まった。青森県の縄文土器として優れた亀ヶ岡式土器が知られている。旧石器時代は土器が無かったので食物の貯蔵、煮炊がなく食物の幅は限られていた広大な縄文遺跡としては三内丸山遺跡が有名。東北は気候的に厳しい。環境で5年に一回程度の割合で冷害による凶作に見舞われている。従って農業を主体とする弥生文化は受け付けられずに狩猟主体の縄文文化がヤマトが弥生時代に入っても継続していたと言われる。山野に木の実が豊かで、走獣も多く狩猟に適し尚且つ、三方向を海に面してサケ

マスの魚介に恵まれていることから、東北の縄文時代は日本で一番豊かな地域であったと想像されている。

(3) 弥生時代～飛鳥時代

青森県の西半分が津軽と呼ばれたのは古い。ツガルは陸奥の縄文居住者地域よりも更に遠い北海道側(オホーツク人)の地域を指す。

(4) 奈良時代: 多賀城

7世紀中期まで、地方豪族は国造として独自に地方を支配していたが7世紀中期～後期に律令体制が敷かれて中央集権体制となり大きく国家体制が変化した。7世紀半ばには、現在の福島県～宮城県中部までと山形県の南部(置賜郡)と中部(最上郡)が畿内政権に服属し、道奥国(みちのく)が設置された。古墳時代早期に畿内政権の象徴である前方後円墳が多数築造されている。8世紀初頭に東北塩釜に東北の鎮守府多賀城(宮城県)が創建された8世紀初期になって、大和朝廷の勢力は多賀城(遠の朝廷)を拠点に陸奥の北上川流域(現岩手県)や出羽の雄物川流域(現秋田県)にまで及んだ。

多賀城は8世紀はじめ、北の蝦夷に対する防柵として設置された。多賀の地名は「古郷の名」と言う本に記載されている。当初は「陸奥鎮所」と呼ばれていた。709年頃、陸奥や越後の蝦夷が良民を害する為蝦夷討伐軍が派遣されたのが始まり。陸奥鎮所が多賀城へと発展の貢献者は大野東人。当初は単なる蝦夷に対する防御柵であったものが支城となり行政機関を兼ねるようになった。大野東人は大野果安の子で、父果安は壬申の乱で近江朝将軍であった為、天武朝では不遇で東北に流れたのかも。709年、東人が従軍した時の陸奥鎮東将軍は巨勢麻呂だった。平定後巨勢麻呂は都に、東人はこの地に残り治安と稲作地の開発に努めた。714年、新羅国使到来時に東人(正七位上)は儀仗部隊として一時上京。719年従五位下に叙せられ、729年陸奥鎮守将軍(従四位上)に任ぜられた。大和朝廷は701年の大宝律令制定から二十数年後、720年代に多賀城の内容充実を図る一方、宮城県に郡を置いた。多賀城は北九州の大宰府と並んで「遠(とう)の朝廷(みかど)」と呼ばれる。8世紀初頭、多賀城で貢献した鎮守府将軍「大野東人」を讃える「多賀城碑」に「靺鞨ノ国界ヲサル三千里・・」と言う記載がある。靺鞨は沿海州や黒竜江沿岸、更にはシベリア東部を指す呼称であり、8世紀当時、東北日本と北アジアとの交流があったことをうかがわせる。

多賀城の役割は「遠の朝廷」として東北討伐よりも「弥生式農耕の勧め」であったかも知れない。その証拠に、715年、関東六か国の富民六千戸を農民モデルとして陸奥に移住させている。多賀城碑は762年に節度使として赴任していた藤原朝獬(アサカ)が大野東人の東北鎮守の功績を讃えて建立したもの。新井白石の「同文通考」によれば江戸中期に土中から発見されたと言う。松尾芭蕉も奥の細道で訪れている。日本海側では、新潟県上越地方まで征服した大和朝廷と越国の連合軍が「柵(き)」と呼ばれる前線基地を築きながら北進した。647年に淳足柵(新潟市中心部)を、更に648年に磐舟柵(岩船郡)を設置して日本海沿岸を越国に組み入れて行った。658年、越国守・阿倍比羅夫が180艘の軍船を率いて日本海を北上し鰐田(あぎた)の浦(秋田市?)から津軽へと至った。(日本書紀)阿倍水軍は658年～660年まで三度渡航し交易をして帰っている。更に律令体制が整い大和朝廷軍は荘内地方に北進して、現在の酒田市の最上川河口に出羽柵を設置。越国が越前・越中・越後の3ヶ国に分割されると708年荘内地方に出羽郡が設置され越後国に組み入れられた。712年、出羽郡は越後国から独立して出羽国になり、陸奥国から置賜郡、最上郡を編入(国府は城輪柵遺跡当りに設置?)733年には出羽柵を秋田清水岡(秋田城当り?)に移した。724年には仙台に多賀城が築かれ、南東北は大和朝廷の支配下に。北東北は北上山地で太平洋と隔絶され、岩手県の北上川流域(日高見国)と秋田県横手盆地などは蝦夷の勢力圏として残された。780年、光仁天皇の時、伊治皆麻呂(コレハルノキミサマロ)が反乱して多賀城を奪った。平安時代、桓武天皇は3回に渡る蝦夷討伐を行い、坂上田村麻呂が征夷大将軍となって、蝦夷軍アテルイと戦い勝利して奥六郡に胆沢城を築いた。この後、蝦夷は朝廷に服従を誓って俘囚となり一部は日本各地に集団で強制移住させられた。朝廷の支配が確立されると関東や北陸から多数の入植者が入り、東北地方の内地化が進んだ。俘囚の中から、安倍氏が勢力を伸ばして、奥六郡を支配した。

奈良時代 日本海側

太平洋側 北東北

(5) 平安時代

平安

平安初期(9世紀中期)でも、朝廷の東北への律令体制浸透せず、青森県の北端は「外が浜」と呼ばれ圏外であった。平安朝の京の都では陸奥の天地を想像して多くの歌枕を生んでいる。平安初期の源氏物語・ひかる源氏のモデルとして有名な源融(822～895)は自宅の庭池に塩釜浦を擬えて塩を焼いて煙を立ち揚げている。「安達の真弓・・」と万葉集や古今和歌集に歌枕に取り上げられている。

平安末期には西行(1118~1190)が出家して陸奥へ、歌枕の聖地を訪ねている。平安時代に入ると、東北地方は俘囚の中から阿倍氏が勢力を伸ばして奥六郡を支配したが、源頼義と対立して、前九年の役で滅ぼされた。その後、清原氏が勢力を張ったが、後三年の役で源義家に滅ぼされた。平安時代末期から中世初期には、北上川流域(奥六郡)で奥州藤原氏が栄え、平泉が平安京に次ぐ日本第2都市になるまで発展する。その後源義経を匿ったかどで、鎌倉政権に侵略の口実を与え滅ぼされる。

(6) 鎌倉~江戸時代

鎌倉

1) 鎌倉時代(13世紀)

その後、坂東を中心とする武士団が多く設置され、北条氏の所領が広く設定されたが一部には津軽地方の安藤氏のように在地領主と見られる豪族が勢力を維持した。安藤氏は北条得宗から蝦夷代官に任命され、北東北から北海道を支配したと言われている。安藤氏の本拠地、十三湊は交易で栄え日本有数の都市となった。岩手県から青森県東部に架けての地域は南部と呼ばれてきた。鎌倉時代に甲斐の国から南部三郎光行等が鎌倉由比ヶ浜から船にて八戸に上陸したと「東南旧指録」に記載。

2) 室町時代~江戸時代

室町

鎌倉幕府滅亡後、後醍醐天皇の建武の中興で、奥州平定に北畠顕家が派遣され、陸奥国府を支配した。後に室町幕府は奥州探題、羽州探題を設置したが、関東を統治した鎌倉府に統合された。室町時代に入ると、安藤氏は南部氏との抗争に敗れて津軽を追われて秋田地方に移り十三湊の繁栄は失われた。鎌倉時代まで、青森県まで、東北の大部分は南部氏の所轄地であったが室町の頃津軽為信と言う英雄的人物が出て津軽にある南部氏の石川城を奇襲して攻め取り津軽一円を平定して津軽城(1603)を築城。このため、東北では津軽と南部は対立する犬猿の構図となっている。

戦国

戦国時代、山形の最上氏、伊達の伊達氏、三戸の南部氏、会津若松の蘆名氏などが勢力を競った。関ヶ原の後、常陸国水戸の佐竹氏が安東氏の後裔の秋田氏と入れ替り秋田に転封された。伊達正宗は奥羽六十余郡の半分を征服奥州藤原氏に迫る興隆を出羽国の内陸部は、各盆地を中心とする支配体制で戦国時代を担った。出羽国内陸部の盆地勢力は陸奥国領域にも積極的に攻勢に出た。江戸時代の有力な大名は上越市から会津若松、更に米沢に移った上杉氏、保科正之を家祖とする会津松平、米沢から仙台に移った伊達氏、盛岡の南部氏がある。江戸中期には芭蕉(1644~1694)が、白河の関を越えて、「奥の細道」を旅している。江戸時代後期、天明の大飢饉で10万人以上の餓死者を出し多くが米沢藩主上杉鷹山は藩政の改革を行って飢饉に対処した。天保の大飢饉でも東北地方は多くの死者を出した。江戸幕府が倒れて、幕末1868年には北陸地方東部の北越戦争から続く会津戦争など戊辰戦争の舞台となり、東北、北陸東部の諸藩は敗れた。同盟に参加した藩は所領を減らされ北海道へ家臣団を移動した。(札幌開発、北海道開拓使となる)

江戸

明治~

1869年、戊辰戦争に敗れ、奥羽越列藩同盟諸藩に処分が出された。陸奥国は磐城・岩代・陸前・陸中・陸奥国に、出羽国は羽前・羽後に分割この分割で陸前・陸中・陸奥は三陸と呼ばれ、リアス式海岸の三陸海岸三陸沖などで良く知られている。明治4年(1871)の廃藩置県で東北6県となった。

口東北史年表(大和朝廷の蝦夷史略)

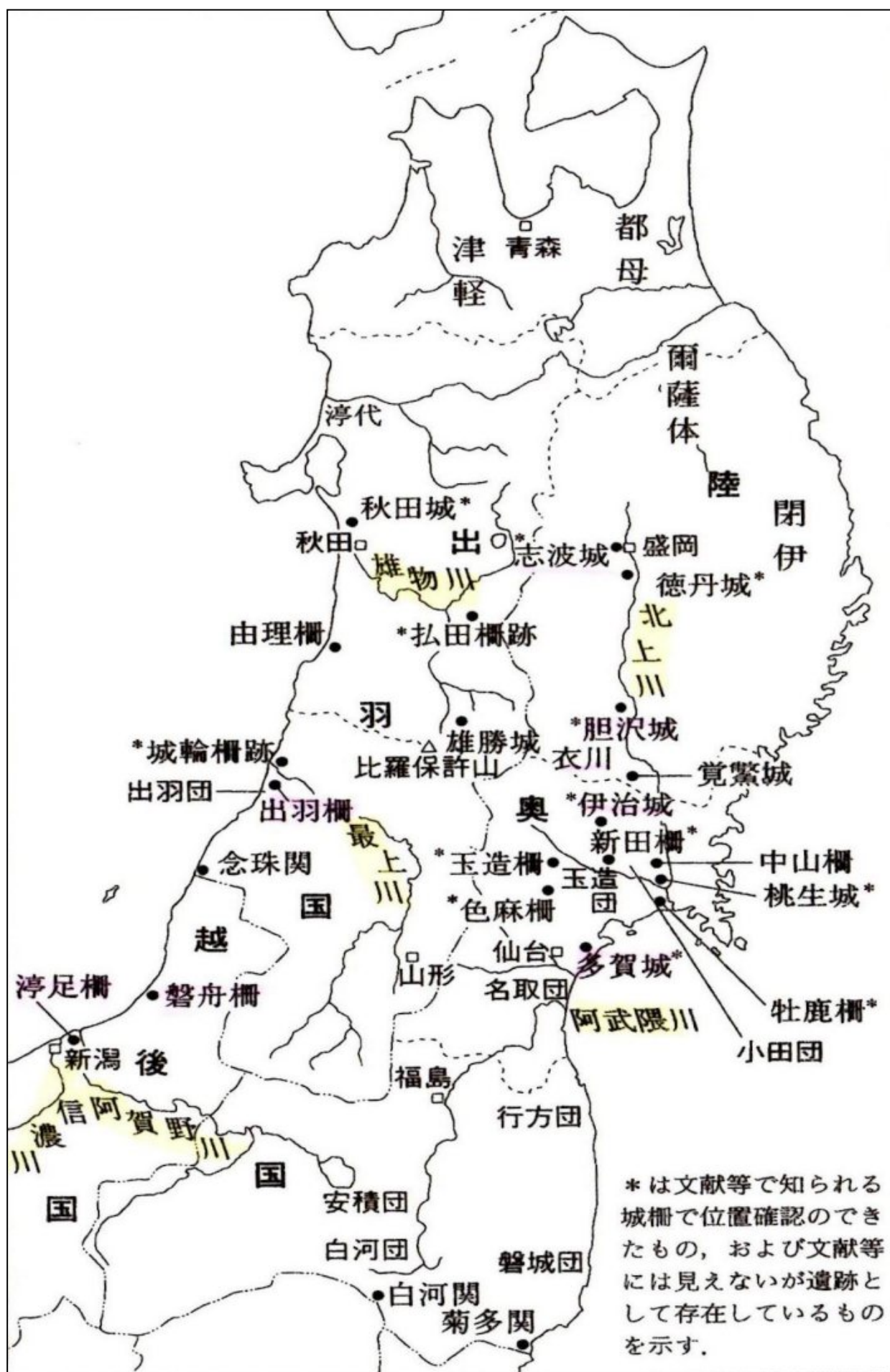
- 景行25 景行天皇時代に竹内宿禰?が北陸・東北を視察して、2年後に帰還して日高見国の蝦夷の事を報告し攻略を勧める。
- 景行40 東国蝦夷が反乱したので日本武尊?を派遣。大伴武日連と吉備武彦が従う。
- 景行51 伊勢神宮の蝦夷を三輪山に移し、その後畿外に移した。
- 4C後半 播磨・讃岐・伊予・安芸・阿波5か国の畿外に移動した蝦夷が佐伯と宣伝。
- 応神3 東北4C前方後円墳から、大和政権がこの頃東北遠征を開始したと言われる。
- 仁徳55 蝦夷が朝貢
- 478雄略 蝦夷が反乱したので、上毛野田道を派遣するが伊勢水門で敗死。
- 581敏達 倭王武(雄略)の宋への朝貢文言には「東は毛人(蝦夷)55か国を征し…」と記載。
- 637舒明 蝦夷の反乱が有り、大毛人アヤカス等を召して首謀者の誅殺を宣告。
- 647大化 この年蝦夷が朝貢せず、上毛野形名を将軍として派遣したが敗走。
- 648大化 淳足柵(ヌトリノキ)を作り、柵戸を置く。
- 磐舟柵を作り、蝦夷に備える。

- 655齊明 難波で蝦夷を饗応し冠位を授ける。この年、蝦夷・ハヤトが服属する。
- 658齊明 越国主の阿倍比羅夫が蝦夷を征討。秋田～能代～津軽～北海道まで。
- 659齊明 阿倍臣が秋田・能代・津軽の蝦夷を討伐。陸奥・越に国郡司を置く。
- 660齊明 阿倍臣が船軍を率いて石狩川で肅慎国を帰順させる。
- 665 百済の男女4百余人を近江神前郡へ
- 666 百済の男女2千人を東国に移す
- 669 百済男女7百余人を近江蒲生郡へ移す
- 669天智 遣唐使が蝦夷を伴い入唐。
- 676 新羅(肅慎人ミシハセ含む)使節団到来
- 680 新羅使者到来
- 697文武 陸奥の蝦夷朝貢。
- 708和銅 越後に出羽柵を設置。
- 709和銅 陸奥鎮所(後の多賀城)を置く
陸奥・越後の蝦夷を鎮めるため近江・越前・越中から兵士を徴発。
巨勢麻呂・佐伯等を蝦夷征伐に派遣。
- 910和同3 大伴旅人等が初めて隼人・蝦夷を元日朝賀に参列させた。
- 714和同5 出羽国設置、新羅国使の到来で大野東人を東北から一時帰還
- 720養老4 陸奥蝦夷の反乱。按察使・上毛野広人が殺害され多治比県守を持節征夷将軍に。
- 724神亀1 陸奥按察使兼鎮守将軍大野東人が多賀城設置(多賀城碑文)
- 729 大野東人(従5位)、陸奥鎮守将軍となる。中央から藤原麻呂(不比等4男)
持節大使着任。
- 733天平5 出羽柵を秋田・高清水へ移す。雄勝村に郡を建て民を置く。
- 737天平9 遣陸奥使藤原麻呂・鎮守府将軍大野東人が俘長と融和し雄勝城の築城中止。
- 757天平宝 大伴古麻呂を陸奥鎮守府将軍、佐伯全成を按察使とする。
- 758天平宝 藤原朝狩が陸奥国に桃生城(モノウジヨウ)・雄勝柵を築城。(蝦夷政策の前進基地)
敷地:東西(800m)、南北(650m)、外周を築地で囲む。
- 759天平宝 出羽国に雄勝郡・平鹿郡設置。陸奥・出羽両国に駅家を置く。坂東8か国の浮浪
人を雄勝柵。
- 760天平宝 陸奥按察使兼鎮守将軍藤原惠美朝狩の時雄勝・桃生城完成
- 762天平宝 藤原朝獬(アサカ)節度使が大野東人の功績を讃えて多賀城碑建立(去蝦夷国界
一百廿里)藤原惠美が多賀城を修造(多賀城碑文)、江戸時代新井白石の頃発見
され芭蕉も見た。
- 767神護景 伊治城完成
- 769神護景 蝦夷の朝賀参列は神護亀5で廃止。
- 774宝亀5 蝦夷が桃生城に侵攻。按察使・大伴駿河麻呂これを討つ。ミシ蜂起・戦いは38年間。
- 777宝亀9 陸奥鎮守将軍・紀広純が出羽国軍が蝦夷に敗れ退却と報告。
- 780宝亀11 伊治郡大領の伊治砦麻呂の反乱、紀広純殺される。砦麻呂が雄勝城を奪う
以後、律令国家と蝦夷が全面戦争に入る。
- 781天応1 桓武天皇は後任に陸奥按察使藤原小黒麻呂・陸奥守紀古佐美派遣
- 782延暦1 大伴家持が陸奥按察使兼鎮守府将軍となる。
- 784延暦3 長岡京遷都、大伴家持は持節征夷将軍(在京将軍?)となる。
- 785延暦4 多治比宇美:陸奥按察使兼鎮守府副将軍、大伴家持:蝦夷対応正規軍常駐を進言。
大伴家持死す。藤原種継暗殺事件発生。
- 789延暦8 諸国から軍勢4万を集め、大規模な蝦夷軍事行動始まる。アテルイとモレが巢伏の戦い
で勝利征夷将軍紀古佐美が蝦夷軍に大敗を奏上。(死者25人、溺死者千余人)
- 792延暦11 軍団廃止、健児の制を定める。(諸国の兵士を廃止し、郡司の子弟を採用)
農民の労役負担の軽減と軍団の私物化を覗くため。(経費削減と国際緊張による)
- 794延暦13 平安京遷都
- 797延暦16 坂上田村麻呂を征夷大將軍に任命
- 801延暦20 坂上田村麻呂、蝦夷を討伐。
- 802延暦21 坂上田村麻呂に胆沢城の造営を命ずる(この後鎮守府は多賀城から胆沢城へ)
蝦夷の総師アテルイの降伏を報告
- 811弘仁2 文屋綿麻呂が宝亀5年から38続いた蝦夷征伐終了を奏上

(平安時代後半)奥州藤原氏の興亡

- 1051～106 前9年の役:清衡の父・藤原経清が義父で陸奥の阿倍頼時と一緒に国司に反抗
したが清原氏の力を借りた源頼義・義家に討たれて決着。
- 1083～108 後三年の役:清原氏の相続争いから清原氏の養子となっていた清衡が源義家の
支援で異父弟・家衡を倒し藤原氏奥州が成立。

◇東北古代地図



◇東北古代史地図(11世紀)



(2)東北の古代

1)はじめに

みちのく (奥州) 東北の名称は歴史的には古代において畿内から始まる東海道、東山道の両方の道の奥にある事から「みちのおく」「みちのく」とされ南東北に道奥国(みちのおくのくに)が設置された。その後陸奥国と出羽国が設置されると両者から一文字取って「奥羽」「奥羽両国」「奥羽州」と呼ばれた。更に、もっと短縮して、単に「奥州(おうしゅう)」とも呼ばれた。他に東北と言う名称は、江戸時代・天保期の幕末になってから文献に現われる。公的な資料としては、慶応4年(1856)に内勅で秋田佐竹藩主に東北と下賜されたのが最初。五畿七道の東北3道(東海道・東山道・北陸道)、即ち、畿内天皇の在所から見て東・北東にあるすべての地域を指していたようだが、単純に「東国」と「北陸」の合成語(東北)とも考えられる。現在の東北地方は一般的に青森県、岩手県、宮城県、秋田県、山形県、福島県の6県を指す。これら6県は本州の約3割の面積を占める。但し、日本の14地域区分では新潟県を加えた7県を指す。古代の東北地方は多賀城が設置されて畿内政権の勢力が及んだ南東北と畿内政権の影響力が弱い北東北の南北2区分されると畿内政権の影響力が弱い北東北の南北2区分される場合と奥羽山脈で区切られた陸奥国(内陸国・政治勢力範囲)と出羽国(沿岸国・商業勢力範囲)の東西2区分される場合がある。即ち、陸奥国の国府が仙台平野の多賀城におかれ、出羽国の国府が庄内平野の酒田に置かれた事がある。また気候的には「太平洋側」と「日本海側」に単純に区分される事も多い。記紀に東北が登場するのは古墳時代以降で、蝦夷＝肅慎(シハセ)として意識されている。古代、現代の福島・宮城・岩手・青森の4県を纏めて陸奥(むつ)と呼んだ。明治維新で太政官令(1868)により東北は磐城、岩代、陸前、陸中、陸奥の5か国となり、陸奥は今の青森県一つに狭まった。明治4年に、陸奥は青森県と名称が変更になり、津軽藩と南部藩と下北半島の3地域から成る現在の青森県。陸奥は当初は「道奥国(みちのおくのくに)」と表記されていた。7世紀半ばの大化の改新で「道奥(みちおく)」と変更になったが大宝律令で「陸奥」(むつ)となる東北と一口に言っても、日本海寄りの「津軽地方」と「南部」と呼ばれる。太平洋側で大きく人情、風習が異なる。東北の古代については殆ど系統だった資料は見い出せないのが断片的な資料を年代順に整理しながら大局的な東北古代を想起したい。北海道から東北に駆けては大陸の靺鞨族の渡来・文化的影響があったと言われる。東北と言えば長い間蝦夷の地として大和朝廷の支配が及んでいなかった。鎌倉幕府が、東北に進出する前に土着民としてアイヌ人・アイヌ文化が形成されていた。東北蝦夷には三種類あり、都に近い方から「熟ニキ蝦夷」、「荒蝦夷」、最も遠い「都加留ツガル」東北の産物として有名なものには、南部鉄びん、わんこそば、南部漆器があり、名馬の産地である。東北の有名人としては原敬(政治家)、米内光政(軍人)、田中館愛橘(物理学者)、宮澤賢治(詩人)、金田一京助(言語学者)、内藤湖南(歴史家)(特産品)(観光名所)十和田湖、弘前城は桜の名所、

2)東北の縄文時代

1. はじめに

旧石器時代は氷河期の影響を受け、現在よりも寒冷であった。其の為当時の海岸線は現在よりも沖合に有り、現在は改定に沈んでいるために海岸線での生活については殆ど解っていない。

氷河期が去り、地球が温暖化して縄文海進(海岸線が内陸に進む)が極度に達したのは縄文時代の早期末から前期はじめである。日本の新石器時代は縄文時代からと言われ、土器の製作が始まった。旧石器時代には土器が無かった。食物の貯蔵、煮炊が始まっていなくて、食物の幅は限られていた。縄文時代は気候が温暖化して縄文中期には東北地方は現代より暖かかったと考えられている。

東北地方の縄文時代は西日本と較べて遙かに豊かであったと言われる。縄文時代の東北地方の人口密度は近畿地方より高く、関東は30倍以上、東北も5～10倍程度の方が住んでいたと見られている。

東北は縄文時代の狩猟、漁猟生活には最適の環境にあった。一方弥生時代

の稲作・農耕には不適であった。

縄文時代の東日本は落葉広葉樹林が生い茂り、クミ、トチ、トングリなどの堅果類が豊富で、森にすむ鹿・イノシシなどと沿岸に押し寄せるサケ・マスと任せて動植物資源に恵まれていた。従って東日本に人口が集中して優れた縄文遺跡が集中。実際、青森県は縄文時代には亀ヶ岡式土器を生み出すほど豊かであった。

これに対して西日本の縄文文化は照葉広葉樹林のため堅果類の恩恵を蒙ることが少なかったため稲作(農耕)中心の弥生文化が発達した。

縄文文化は縄文後期の寒冷化により衰退し、縄文末期には大陸から水田耕作が伝来して西日本を中心に弥生文化が発達した。

東北においても比較的早い時期に弥生文化が伝来したと考えられるが水稲耕作は受容されず縄文文化が継続されていたとする見方が強い。

2. 縄文文化

北東北の縄文文化の代表として、三内丸山遺跡、亀ヶ岡式土器がある。

蒔前遺跡出土の「鼻曲り土面」を御所野縄文博物館で眠るような目をした「大型土偶(萩内遺跡出土)」を岩手県立博物館で、「赤漆塗り木製品(弓)」を是川中居遺跡埋蔵文化財センターで見ることが出来る。

更に鹿角市大湯では縄文人の信仰・祈りの場である「環状列石(ストーンサークル)」を見る事が出来る。

3. 縄文遺跡

青森県	三内丸山遺跡(縄文時遊館)	
土地	八甲田山の丘陵先端部で標高20m、面積約40haの広大な遺跡である。 集落は住居・墓・捨て場・掘立柱建物・貯蔵穴・土壇墓・道路等を計画的に配置。 三内丸山遺跡は青森県青森市大字三内丸山にある。縄文時代前期から中期の大規模集落跡で、1992年、野球場建設に先立ち事前調査が開始された。 1994年に直径1m大の栗の柱6本が検出された。	
調査	2000年に国の特別史跡に指定され、住居群、倉庫群、3層物見櫓建物が復元。 江戸時代、菅江真澄の紀行文「栖家の山(すみかのやま)」に「三内の村の古い堰が崩れた所から瓦、甕、土偶の破片が出た」と、又山崎立朴の「永禄日記」に「1623年、大量の土偶が出土した」と記されている。	
兆候	出土遺物は段ボール数万個に及び土器・石器が大半。日本最大の土偶は有名。 ・クリ・クミ・トチなど堅果類、エゴマ・ヒョウタン・ゴボウ・豆などが栽培されていた可能性が高く縄文時代の文化が相当進んだものであった可能性が高い。	
出土	三内丸山遺跡で最も重要視されているのは「巨大な六本柱建物跡」 柱間隔(4.2m)、太さ(1m)、巾(2m)、深さ(2m)で縄文尺35cmで統一されている。 巾10m超の大型竪穴住居跡、高床式倉庫跡も多数検出されている。	
遺構	道の跡周辺から環状配石墓(ストーンサークル)が検出されている。 此れ程の集落がなぜ終焉を迎えたのかは謎である。	
墓	是川中居遺跡 是川考古館 八戸市縄文博物館	八戸市大字是川字中居 亀ヶ岡式土器 木製飾り太刀 赤塗り壺型土器 クリ、トチ、ナラの堅果類
岩手県	青森県立郷土館 三戸町・八日遺跡 風張遺跡(カザハリ) 縄文時代晩期 八戸市博物館 縄文中期集落遺跡 新井田川下流	遮光器土器 亀ヶ岡文化の代表 合掌する土偶 腕組みする土偶

3) 三内丸山遺跡(縄文時代前期中～中期末)

1. はじめに

三内丸山遺跡は青森県青森市大字三内字丸山にあり縄文前期中から中期末頃の大規模集落で、沖館川右岸の海岸段丘上に立地する。2000年に国の特別史跡に指定され遺跡後には住居群、倉庫群、3層の掘立柱建物が復元されている。人数的には初期は100人程度、縄文後期には500人程度の集落と推定。これ程の遺跡がなぜ滅びたのかは謎ではあるが気候変動が一因かも。この遺跡の存在は江戸時代、弘前藩の山崎立朴が弘前藩の諸事情を記載した「永禄日記」に多量の土偶が出土したと記載があり、寛政年間には菅江真澄の紀行文「栖家の山(すみかのやま)」に三内で古い瓦土偶の破片が見つかったと記録されていた。本格的には1992年、この場所に県営野球場の建設事前調査が行われた時に大

規模な集落跡が発見され、直径約1mの栗の柱跡が6本見つかりこの一帯を遺跡として保存することになったもの。

2. 遺跡の概要

- ・遺跡は約40ヘクタールの広大な範囲に広がり集落内には住居、墓、ゴミ捨て場、大型掘柱建物、貯蔵穴、土坑墓、盛り土、道路跡が見つかった
- ・遺跡は広場を囲むように住居が造られた環状集落と推定されている。
- ・遺跡の代表的のものは、竪穴住居、高倉式倉庫、大型竪穴住居が10棟以上全住居跡が約780軒に及ぶ。
- ・土偶は板状の薄い板状土偶で縄文後期の立体的な土偶の前段階である
- ・遺跡から出土した栗は栽培されていたものと見られている。
- ・植栽された食料用植物として堅果類(クリ、クルミ、トチ)、一年草(エゴマ、ヒョウタン、ゴボウ、マメ)が出土している。

3. 出土遺跡

大型竪穴住居跡(長さ≒32M巾≒10M、屋根は茅葺、樹皮葺き、土葺きがある)
掘立て式建物跡(高床式倉庫＝生活の痕跡が見られない)6本柱の建物跡(柱穴の間隔≒4.2m、巾≒2m、深さ≒2m)環状配石墓(ムラの墓?、ストーンサークル、最古の木棺墓あと)、土器(日本最大の板状土偶)、石器(黒曜石、ヒスイ)、動物の骨(ノウサギ、ムササビ)、その他(琥珀、漆器)
(参考文献)

赤田光男「ウサギの日本文化史」

安本美典他(三内丸山遺跡と「和田家文書」)

村越潔「青森県の黎明」

4) 東北の弥生時代

縄文文化は縄文後期の寒冷化により衰退し、縄文末期には大陸から水田耕作が伝来して西日本を中心に弥生文化が発達した。

東北においても比較的早い時期に弥生文化が伝来したと考えられるが水稲耕作は受容されず縄文文化が継続されていたとする見方が強い。

東北地方に古代稲作が存在したと仮説を提唱し、実証した東北大学の伊東信雄教授; 田舎館村博物館(南津軽郡)・・・水田跡が保存されている。

青森	垂柳遺跡	田舎館村	水田跡	弥生中期	遠賀川式	東北地方で初めての水田跡
宮義	霞目遺跡	仙台	水田跡	弥生初期		名取川と広瀬川の合流低湿地点
岩手	常盤遺跡	岩手・水沢	ガラス製品	小玉菅玉	粃痕土器	岩手県水沢市常盤広町(縄文晩期)
秋田	志藤沢遺跡	八郎潟	粃痕			秋田県八郎潟
青森	砂沢遺跡	津軽	水田跡	弥生前期		弘前市岩木川左岸

5) 東北の古墳時代

1. はじめに

古墳時代には畿内から古墳文化が到来し東北地方でも古墳が造られた。古墳集中している地域は仙台平野や会津地方など東北地方南部が中心。大和王権はその黎明期(4世紀初)に関東・南東北各地の首長とは密接な関係。大和王権の象徴とも言われる前方後円墳が南東北では古墳時代前期(AD250～400)に既に見られる。会津福島には会津大塚山古墳(114M)が、山形南陽市には稲荷森古墳(96M)、宮城県名取市には雷神山古墳(168M)などの大型古墳が築造されている。畿内の古墳文化は南東北には比較的早い時代に浸透している。しかし北東北では、前方後円墳は北上市にある角塚古墳(46m)が見られるだけで、蝦夷塚古墳と呼ばれる古墳は古墳時代終末期の円墳タイプである。

2. 初期大和政権と東北(四道将軍派遣)

① ヤマトケル東国遠征

日本書紀によると崇神天皇10年に「四道将軍派遣」記事があり、北陸道に派遣された大彦命と東海道に派遣された「武渟川命」の親子が会津で合流したとの記事がある。この時両将軍が会津で合流した場所は阿賀野川流域から鬼怒川流域と推察されている。南東北の一部が含まれる範疇である。

② ヤマトケルの遠征

ヤマトケルは日本書紀の景行天皇時の「ヤマトケル東国遠征」記事によれば東北仙台奥の日高見国まで遠征し蝦夷を討伐したやや伝承的英雄である。4世紀初めに、大和政権の象徴である前方後円墳が東北で築造されている事とは照合してくる。東北地方の古墳分布から、大和政権は西暦4世紀後半東北に

進出したと言われる。

③ 常陸の国風土記(久慈郡助川の地名伝承)

1. 古老の話によると郡役所の南方近くに小さな丘がありその形が鯨に似ている事から倭武天皇(ヤマトケル)が久慈(久慈郡)と名付けたと言う伝承が残る。
2. 密筑の里・北東2里半に助川(遇鹿アウカ)の駅家がある。
古老の話では倭武天皇がこの地で弟橘姫とお会いになられたので遭鹿と名付く。又、国司が久米の大夫だった時この地の川で鮭を取った事から助川と名付くと。鮭の親を須介(すけ)と呼んでいたとの事
3. 以上の伝承でこの地を「久慈郡助川」と名付く。

④ 東北の国造制

仁徳天皇時代に蝦夷が反乱したので上毛野田道を派遣して撃たせた。田道は伊勢水門(いしのみと)で戦死したので部下が腕輪を形見に妻に持ち帰った。その後、蝦夷が田道(たち)の墓を掘り起こすと大蛇が現れ、蝦夷は次々に噛み殺されたとの伝承あり。(田道死すと雖イドも、遂に讎ムクイを報ず)

3. 東北地方の古墳

東北地方では、大和政権の特徴を示す前方後円墳が4世紀後半にできている事から古墳時代前期(AD250~400)に大和朝廷と関東・南東北各地は密接な関係に有った。記紀の蝦夷討伐、国府等の記載記事と整合しない。

a)会津盆地の古墳(○一簣(いっき)古墳群、○宇内青津古墳群、○雄国山麓古墳群)

- ①大塚山古墳 4C末、前方後円墳 L114m(70m+54m)、H10m 一簣古墳群(会津福島)
割竹形木棺(南北2基)
三角縁神獣鏡、四獣鏡
三葉環頭太刀、農具、勾玉

b)仙台平野の古墳

- ②雷神山古墳 4C末、前方後円墳 L168m(98m+96m)、H12m 宮城県名取市、東北最大
遠見山古墳後の首長
- ③遠見塚古墳 4C末、前方後円墳 L110m(63m+47m)、H6.5m 後円部2段築成、粘土槨2基
- 観音塚古墳 前方後円墳 L163m(32m+32m)、H6.0m 奈良桜井茶臼山古墳と同期
- 桜井古墳 L75m 前期古墳
- 青塚古墳 4C末、前方後円墳 L100m 古川市、前期末古墳

3)米沢盆地の古墳

- ④稲荷森古墳 4C末、前方後円墳 L96m(62m+34m)、H10m 山形南陽市

4)北東北の古墳

- ⑤角塚古墳 前方後円墳 L46m 北上市
- ⑥蝦夷塚(エゾツカ) 古墳時代後期の円墳

c)江釣子古墳群(蝦夷塚)

(7~8世紀)

- 1 岩手県北上市にある古墳時代後期後半に属する古墳群。(蝦夷塚)江釣子古墳群(えづりここふんぐん)は北上川に注ぐ和賀川北岸の自然副葬品としては鉄製品が多く出土しており、7~8世紀豪族の墓では。江釣子はアイヌ語で聖地を意味する言葉に似ているとの事で、縄文人はアイヌの祖先で江釣子は神々の住まう聖地立ったかも知れない。

2 古墳の規模・形状

本古墳群は4古墳群(猫谷地古墳、五条丸古墳、八幡古墳、長沼古墳)から構成されている。本古墳群では直径10m前後の円墳が120基程で構成されている。

3 埋葬施設・副葬品

古墳の大半は川原石を小口積みした竪穴式石室である。石室の平面形は長方形で、長軸(2~4)メートル、巾0.4~0.7と狭い。出土遺物は薙手刀、直刀、鉄鏃、勾玉、管玉切子玉、ガラス玉、金環、轡、鎌、土師器など種類も多い。

(3)律令時代の東北

1)はじめに

東北地方ははじめ「道奥国」と表記されていたが7世紀半ばの大化の改新で豪族の私有だった土地と人民が国家のものとなり公地公民となり、「道奥」と標記された。更に701年年制定の大宝律令によって「陸奥」となった。701年の大宝律令制定から20数年後の720年代に多賀城が整備されて奈良時代後半にようやく宮城県に郡が設置された。大和政権にとって瀬戸内海に浮かぶ小さな淡路島が「淡路

国」である一方で「陸奥」は、岩手県から青森県東部にかけて「南部」と呼ばれ、12～13世紀頃に甲斐国から南部三郎光行等が鎌倉から船で八戸に上陸したらしい。その南部の津軽地方で戦国時代に津軽為信と言う人物が出て、岩木山東麓に津軽氏を興して陸奥は津軽と南部とに2分された。大和政権は715年に関東6カ国の6千戸を農民モデルとして東北に移住させ平安初期(9世紀半)にやっと現在の岩手県・秋田県に律令体制が浸透するようになった。当時は、今の青森県辺りは「外ヶ浜」と呼ばれ、蝦夷と呼ばれた陸奥の縄文人より更に遠くに住む不従順なツガル蝦夷が住む程度の情報しかなかった。8世紀多賀城に居た鎮守府將軍「大野東人」の多賀城碑には「靺鞨ノ国界やシハリア東部からの渡来人等と何々かの交流が有ったと推定される。大和朝廷にとって多賀城は北九州の大宰府と並んで東の朝廷であった。8世紀初頭に大和朝廷によって創建された奥州の多賀城の外港として塩釜があった。

2) 律令時代の概要

古代に入ると、ヤマト王権と奥羽越地域の勢力関係は古墳時代までの緩いあり、蝦夷が住んでいるとされた。その後古代から中世に掛けて畿内政権側の征服戦争と東北地方の独立の動きの中で征夷軍と蝦夷軍が衝突して東北の歴史は作られていった。

3) 大化の改新以降の東北政策

1. 日本海側

647年(大化3年) 沼垂城(長岡市八幡林遺跡の木簡)
648年(大化4年) 磐舟柵
709年(和銅2年) 出羽柵 山形県庄内付近か
713(和銅5) 出羽国 出羽国設置

2. 太平洋側

7C中～8C初 郡山遺跡 仙台市の官衛遺跡、1期(7C中～末)、
2期(7C末～8C初)
7C末～9C 名生館遺 丹取郡の中心にある官衛遺跡

3. 蝦夷の反乱

709(和銅2年) 陸奥・越後に蝦夷が侵入、兵器を出羽柵に移動
720(養老4年) 蝦夷が按察使・上毛野広人を殺害
720?～742 大野東人が東北統治
724(神亀元年) 多賀城創建(陸奥国府を郡山から移して鎮守府設置。)
733(天平5年) 出羽柵を秋田に移す(後の秋田城)
737(天平9年) 多賀城と出羽柵間の連絡路を設置、蝦夷を内地に移住。

4. 多賀城の変遷

第1期 724～762 多賀城創建時(724)
第2期 762～780 藤原恵美朝狩の改修から伊治公砦麻呂の反乱
第3基 780～869 伊治コレハル反乱からの復興と貞観11年大地震による倒壊
までこの間、802創建の胆沢城に鎮守府移転
第4期 869～10C 貞観大地震の復興から多賀城閉鎖まで

5. 東北38年戦争

①第一次征討 宝亀5～8(774～777)

②第二次征討 宝亀11年～天応元年(780～781)

780(宝亀11) 伊治砦麻呂の乱

・陸奥国上治郡の大領・伊治公砦麻呂(コレハルノキミザマロ)が反乱を起して紀朝臣
広純を伊治の城で殺害。砦麻呂は俘囚の子孫。牡鹿大楯が同じ俘囚で有り
ながら、砦麻呂を蝦夷と見下げていたことに反発していた。

780年6月

天皇は副將軍の大伴宿祢益立に蝦夷討伐を督促するが進展ないので委細を
報告せよと勅した。

781(天応1)

天皇は征夷大使藤原小黒麻呂の現地解兵する旨の奏上文を見て急いで都へ
引き上げてはならないと勅を出した。

③桓武天皇の征討準備:783(延暦2年)

・蝦夷討伐には戦闘訓練された者、弓や乗馬に慣れた者、坂東八国の郡司の
子弟等の軍士に堪える者を軍人として訓練 して備える事、並びに無位の公民
には傭を免じる事を勅した。

④大伴家持の陸奥経営:785(延暦4年)

・大伴家持が785年、名取以南の十四郡を統治する上で遠方からの徴兵では

危急の時間に合わないので多賀・階上(シナガ)の二郡で人民を募り、人や兵を国府に集めて東西の防備としたと報告。また、予め不測の事態に備えて正規の軍を組織する事を嘆願。

⑤第三次征討:789(延暦8年)

- ・征夷大將軍の紀朝臣古佐美がアテルイに大敗した。紀古佐美はアテルイ攻撃の為に各2000人の軍団を3軍団用いてアテルイを撃つべく攻めたが囫作戦に惑わされて失敗して大敗を喫した。そこで、征討軍を解散して兵士を賊地外に引き上げるように全軍に命じたと天皇に奏上。
- ・奏上の内容は賊退治は89人、官軍死亡者は千人余、更に負傷者二千人にも拘らず、「大兵を挙げて一度攻撃すれば、忽ち荒廢の地になりました」とは虚飾以外の何物でもない。賊の奥地も極めず、其の集落を攻略したと言い慶事と称して至急の駅使を遣わすとは何事かと天皇は怒った。天皇は現地報告が虚飾に満ちている事に不快感を露わにして、今回の敗戦は副將の作戦間違によるものであると征夷大將軍に詔した。

⑥第4次征討:794(延暦13年)

- ・794年、大伴弟麻呂を征夷大將軍に任命。(坂上田村麻呂が副將軍)
- ・大伴氏は斬首457人、捕虜150人、捕獲馬85匹、攻め取り75邑を報告
- ・795年大伴弟麻呂は征夷大將軍を返上。(坂之上田村麻呂副將軍で勝利)

⑦坂上田村麻呂の遠征(801年:延暦20年)

- ・802年アテルイと坂上田村麻呂の戦いで終結を見た。
- 田村麻呂が朝命により東北遠征に出たのは平安遷都の794年でその成果は陸奥の拠点を宮城県多賀城から北の岩手県南部に胆沢城、志波城まで進出したこと。青森県外ヶ浜や津軽・南部の津軽蝦夷は依然として手付かずで残されていた。

4)蝦夷アテルイ(阿弭流為)

蝦夷討伐(征夷大將軍:坂上田村麻呂)

1 はじめに

アテルイ(802)は平安時代初期の蝦夷の軍事指導者。

789年に日高見国胆沢(現在の岩手県奥州市)に侵攻した朝廷軍を撃退したが最終的には坂上田村麻呂の蝦夷討伐合戦で敗北、処刑された。阿弭流為は800年頃(約1200年前)胆沢地方に住んでいた蝦夷の1人です。阿弭流為と言う名は「続日本記」、「日本記略」に1回登場する。延暦8年(789年)巢伏村の戦いで朝廷軍の征夷大將軍・紀古佐美に大勝した蝦夷のリーダー。

大墓公阿弭流為(タモノキミアテルイ)

盤具公母礼(イワグ?キミレ)

2 第1回蝦夷征伐(続日本記)

8世紀後半、延暦7年(788)12月朝廷は東北蝦夷平定のため紀古佐美(キノサミ)を征夷大將軍として胆沢地方に絞って進めた。翌8年(789)、遠征軍約53000人が多賀城を出発して3月末には胆沢南端の衣川に到着し、前、中、後の3軍体制で布陣し6月に攻撃開始した。蝦夷との初めての合戦である、この「胆沢の合戦」ではアテルイ等は陽動作戦とゲリラ戦で少人数であるにも拘らず大勝利した。(アテルイ軍約1500人)

この後、朝廷は13年間にわたり2回胆沢遠征をするがいずれも失敗に終り最後に坂上田村麻呂の登場となる。この間、阿弭流為側では大半の戦死を失い戦争による地元の荒廢と食糧難に見舞われていた。

3 第2回、3回恵美氏征伐

延暦13年(794)、桓武天皇は征夷大將軍に大伴弟麻呂、副將軍に坂上田村麻呂田村麻呂を任命して6月に胆沢遠征を遂行し勝利の報告をした。

4 アテルイ降伏(日本紀略)

弘仁2年(802)年、田村麻呂は胆沢城の築城のため三度目の胆沢下った長年の戦いで疲労したアテルイと盤具公母礼(もれ)が弘仁4年(804年)投降してきたので田村麻呂は軍事首長2人を従えて上京(延暦21年8月)

5 蕨手刀

平安時代初期、桓武天皇時代に日高見国(現在の岩手県水沢市)を拠点とした蝦夷の首領アテルイは大和朝廷軍と10数年戦いました。少人数のアテルイ等の強さの背景に馬(機動力)と刀(武器)があったと言われる。馬は当時から関東、東北は名馬の産地で、一方武器の刀は蕨手刀に其の強さの秘密があったようです。蕨手刀は奈良時代から平安初期に短期間、東北から北海道で使われた柄の部分の蕨の形をした反りが付いた刀で直刀に比べて馬に乗って薙ぎ払うように

して使用するに適した形状であった事から騎馬戦で威力が有ったようです。
大和朝廷側の武器は直刀で、突き刺すのに適した
(参考文献)
伊東博幸「エミの世界」
新野直吉「田村麻呂と阿弭流為」

(4)平安時代後期の東北

1) はじめに(平安時代後期の東北地方)

東北の11世紀半ば、陸奥国は安倍氏、出羽国は清原氏の支配下にあった。
現地豪族(俘囚の長)の実効支配。

- ・陸奥は安倍氏支配(奥六郡)
- ・出羽は清原氏支配(出羽の山北三郡)

東北の 以下奥州藤原氏誕生から滅亡までを見る。
藤原氏 (奥州藤原氏の本拠は現在の岩手県西磐井郡平泉町)

2) 前九年の役(1051～1062)(源頼義と安倍一族の戦い)

1050 陸奥守・源頼義と安倍頼良の乱勃発頼義側の勝利:清原氏の援助で頼義が勝利し安倍氏が滅亡。前9年の役は平安時代後期の奥州を舞台とした戦役。この戦いで安倍氏が滅び清原氏が東北の覇者となる。この戦役は源頼義の奥州赴任(1051)～安倍氏滅亡(1062)までを言う。11世紀半ば、安倍氏が朝廷への貢租を怠る状態になり、1051年、陸奥守・藤原登任が安倍氏懲罰を試みた事から戦闘が勃発した。この戦闘の舞台の地名を取って「鬼きり部の戦い」と呼ばれている。朝廷は河内源氏・源頼義を陸奥守として派遣し、1052年一時的安倍頼時と和睦した。ところが頼義の陸奥守の任期が終わる1056年「阿久利川事件」が起きた。藤原光貞と元貞が夜討ちに会い人馬に被害が出たとの報告があり(陸奥話記による)安倍貞任が藤原光貞の妹と結婚を申し出ていたが断った事による仕返しではと光貞が申し立てたので源頼義は藤原頼時を呼ぶが出頭せず安倍と朝廷は再び戦いに突入。頼時の女婿・藤原経清は頼義を離れて安倍氏に帰属したことで前9年の役が長引く。膠着状態の中、1057年、安倍頼時が胆沢で横死し、後を安倍貞任が継ぐ。源頼義は貞任を(現在の一関)に追撃するが黄海で敗退(1057黄海の戦い)して長男・義家を含む7騎で辛くも逃げおうせた。1062年、苦戦を強いられた頼義は出羽国(秋田)の俘囚・清原光頼に助け舟を求めた。清原氏の参戦で一気に朝廷側が有利となり、安倍氏の拠点・厨川柵(盛岡)・姫戸柵(盛岡)が陥落して安倍氏が滅亡して戦役は終結した。1063年、清原光頼の弟・武則は戦功により鎮守府将軍に補任され奥六郡を与えられた。頼義は意に反して伊予守に任命され清原氏が奥羽の覇者となった。経清の妻・頼時の息女は敵の武貞の妻となり経清の遺児(藤原清衡)も一緒に清原家へ。

3) 後三年の役(1086～1088)

清原氏の内紛で自滅して源義家の勝利となるが優遇されず。

前9年の役後、清原氏が消滅して奥州藤原氏が登場する切っ掛けとなった後三年の役。11世紀、東北地方は出羽国に清原氏、陸奥国に安倍氏が台頭していたが1062年「前9年の役」で安倍氏が滅び清原氏が受け継いだ。清原家は光頼→

武則(弟)→武貞(武則の息子)→真衡(嫡子)と継承されて行く。

清原武貞は藤原経清の妻を自らの妻としていた。この妻は前9年の役で戦死した安倍氏党主・安倍頼時の娘で経清との間の子・清衡を連れ子としていた。その後武貞とその女性の間に家衡が誕生した。武貞の死後、その子真衡が継ぐも子供が無く海道小太郎(成衡)を養子に迎えた。成衡の婚礼に清原一族の長老・吉彦秀武が祝いに訪れたが真衡が対応せず秀武は帰る。

真衡と秀武と戦いが始まる。秀武は真衡と不仲であった家衡と清衡に連絡を取る。1083年、真衡は源氏との親戚を目論み、源頼義の娘と呼ばれる女性と結婚。同年秋、源義家が陸奥守を拝命して陸奥国に入ったので国府で歓待後、出羽の秀武を攻める、この時留守番の家衡と清衡も反旗を翻すが義家・真衡軍に大敗して降伏する。但し、この時出羽に向かっていた真衡が突然亡くなる。義家は真衡の所領奥六郡を3郡づつ家衡(岩手、紫波、稗貫)と清衡(和賀、江刺、胆沢)に分与した。1086年、家衡はこれを不満として清衡を攻めるが義家の援軍も有ったが敗戦となる。武貞の弟・清原武衡は家衡に合流して難攻不落の金沢柵へ籠る。吉彦秀武が提案した兵糧攻めによりついに清衡・頼義軍が勝利した。

戦役後、清衡は清原氏の旧領全てを手に入れ、実父・藤原経清の姓藤原に復し、

4) 奥州藤原氏(清原氏内の覇権争い)

奥州藤原氏は前九年の役、後三年の役のあと、寛治元年(1087)から源頼朝に滅ぼされる文治5年(1189)までの間、陸奥平泉を中心に東北地方一帯を支配した。天慶の乱を鎮めた藤原秀郷の子孫と称した。

奥州藤原氏の遠祖である藤原頼遠は「太郎大夫下総国住人」であったとされる。父親が従五位下で頼遠が無官であったことから「平忠常の乱」の罪で陸奥国に左遷され多賀国府の官人になったものと推定される。頼遠の子・藤原経清(亘理権大夫)は亘理地方の荘園と関与して陸奥奥六郡の阿倍頼時の娘を娶り阿倍氏と姻戚関係を結び、1040年には国府推挙で修理大夫で上京し陸奥守・藤原登任の下向時に同行帰省したとの説がある。初代から4代まで、奥州藤原氏100年の栄華を以下に箇条書き。

初代	清衡(105	奥州藤原氏の祖	陸奥押領使	中尊寺建立
2代	基衡(?	東北支配を固める	奥六・出羽押領使	毛越寺建立
3代	秀衡(112	最盛期	鎮守府将軍	無量光院建立
4代	泰衡(115	滅亡	出羽・陸奥押領使	義経を自害させる

奥州藤原氏の繁栄を築いた藤原清衡は度重なる戦いと母親の再婚による複雑な家庭環境を過ごす。清衡は藤原秀郷の子孫で父は藤原経清、母は安倍頼時の娘。1062年、経清は前9年の役で源頼義に殺され、母は出羽国に清原武貞と再婚し、清衡は清原一族として育てられるが蔑視される。後三年の役では異父弟の清原家衡と組み、義兄・清原真衡と戦う。真衡(ササヒ)の死後は現頼義と組んで家衡を倒し奥州藤原家の祖となり、拠点を阿倍氏の馴染みの深い衣川近くの平泉に移す。奥州の戦乱で亡くなった人を弔う為に金色堂と大伽藍を有する中尊寺を造営した。こうした大事業が可能であったのは奥州・陸奥の名産である馬と金による北方貿易であった。清衡は朝廷や藤原摂関家に砂金や馬を献上し信頼を得ることで奥州支配を容認された。奥州藤原氏は中央からの国司を拒まず、丁重にもてなし協力体制を取った事で源平合戦の最中も平穏独自の文化を確立する事になった。2代目基衡は下向してきた陸奥守・藤原基成と親交を結び基成の娘を3代目秀衡の嫁とすることで藤原摂関家と姻戚関係を結び、奥州の摂関家荘園の管理も任されていた。平泉金文化を支えた金鉾山は北から八針(岩手県気仙郡)、今出山(岩手県大船渡)、玉山(陸前高田)、鹿折(宮城県気仙沼)と三陸海岸沿岸にあった。

5) 奥州藤原氏と源氏(奥州合戦)

4代泰衡が代を継いで直ぐ、源頼朝との戦いに敗れて奥州藤原氏100年の歴史にピリオドを撃つ。秀衡は平治の乱で敗れた源義朝の子・義経を匿し、源頼朝に追われた義経は再び秀衡を頼った。秀衡は頼朝からの引き渡しを拒んでいたが、1189年義経を自殺に追い込んだ。この後、義経を匿った事を口実に奥州に出兵する。家臣の造反により泰衡は殺され奥州藤原氏は滅んだ。

(4) 街道をゆく要約版(司馬遼太郎著)

②6 仙台・石巻

○貞山(正宗)堀

阿武隈川河口の亘理(わたり)大橋がある岩沼市から石巻へ繋がる運河。正宗以降も明治時代まで、岩沼市荒浜(南仙台)から北上川河口の石巻まで約47kmも掘り続けられた北上運河遺跡で、伊達正宗が仙台米を江戸まで水上輸送する為に掘った運河。貞山とは正宗の死後の諡名(おくりな)である。

○竹駒神社

社殿が桃山様式の稲荷神社。

日本3大稲荷の一つ、平安時代の初め小野篁(802~852)が伏見稲荷大社から勧請したと伝承されている。小野篁は承和9(842)年陸奥守に任ぜられている。

○宮城野

古代の大宮人(貴族)にとって、能では「宮城野の萩の精」、古歌で「宮城野の萩」であった。江戸時代句人の松尾芭蕉は奥の細道で「宮城野の萩茂りあひて、秋の気色思いやらるる」平安時代歌人の能因法師(橘永愷ナガヤス)「都をば霞とともに立しかど秋風ぞふく白河の関」。橘為仲(11世紀下級武士):都へ「宮城野の萩を掘り取り12個の長櫃に納めて都に運ぶ」

○仙台市内

○駅前広場

市の仙台駅前の戦災復興計画変遷：国鉄駅舎を160m後退→90m(S27)→9m(S33)、仙台駅前のペデストリアン・デッキ(高架歩廊)＋西・東駅前広場を確保
青葉通り幹線道路

○東北大学

○青葉城 東北大学構内は江戸時代は大名小路と呼ばれ大身の屋敷・土塀が連なっていた。明治22年、旧制第二高等学校が置かれ、明治33年仙台医学専門学校になる。現在は東北大学の片平丁キャンパスとして金属材料研究所と本部が置かれている。日露戦争後、長岡半太郎(M36:原子核模型提案)が金属材料研究所に本多光太郎を据え、現在はファイバー・ケーブルを通信に使うアイデアを西沢潤一が継承。

○大崎八幡宮

秀吉の桃山風を残して、家康の権現(八棟)造りに近い(日光東照宮より20年程早い建立)伊達正宗は藤原氏系であるから本来なら春日明神のところ、八幡大菩薩を祭った。八幡信仰は奈良朝以前に清和源氏が氏神にして以来爆発的に広まったもの。大崎八幡の大崎は足利市一族の足利宗家が下総の大崎を領有した由縁。足利尊氏が室町幕府を起すと一門の大崎を「奥州(大崎)探題」とした。正宗は秀吉に会津・米沢を取り上げられて新地・宮城県岩出山城を与えられ、地元には馴染みがない為、名前の知られた「大崎探題」に肖り「大崎の少将」と名乗った。昔の探題大崎氏が地元の氏神として「大崎八幡宮」を祭っていた事から旧大崎領を自領とした時に大崎八幡を引継ぎ、仙台に築城時に「大崎八幡宮」として勧請した。

○仙台城

仙台城は関ヶ原の役直後、1600年から開始された。大工は京都の宮大工で、その後、松島五大堂、大崎八幡宮を造営している。(正宗は秀吉の伏見城下に屋敷を持っていた)

○多賀城(陸奥鎮守709年)

多賀城は八世紀はじめ、北の蝦夷に対する防柵としてスタートし、奥州の鎮守として機能。「遠の朝廷・とうのみかど」と言われた辺境の地(多賀城)は奈良～平安朝を通じて都人に取って、奥州の山河は「宮城野の萩」で有名な詩の名所、憧れの地へと昇華。多賀城の成立は724～728頃といわれ、初代の鎮守将軍は「大野東人?～742」である。709年、大野東人が従軍した時の陸奥鎮東将軍は巨勢麻呂であった。714年、新羅国の国使が来るので儀仗部隊として登朝として呼び戻された事がある。東人は正7位上(714)、従5位下(719)、陸奥鎮守将軍(729)と昇進している。鎮守将軍当時、藤原不比等の第4子・藤原麻呂が持節大使として赴任。

○多賀城碑

節度使・藤原朝彥(アサリ)が大野東人の功績を讃えて建立したと思われる。この碑は新井白石の「同文通考」によれば江戸時代中期に発見されている。松尾芭蕉は1689年5月8日にこの地を訪れている。その後、8世紀初頃に北上川流域(岩手県)、雄物川流域(秋田県)まで進出9世紀中期(平安初期)に、ようやく岩手県、秋田県が京都政権の範疇となる。

○塩釜神社

塩釜は多賀城の東北にあって、今は松島湾の奥に位置するが江戸時代は塩釜港であった。奈良朝時代は多賀城の外港で製塩地であったが、天日式ではなく海水を煮詰めて造る方式。古歌に「藻塩焼く」と言う言葉のとおり塩分を濃くするために海藻を用いた。古神道では山河の精が神で、後世になって古事記の神「塩土老翁」が祭神に選ばれた。塩釜の市中に「オカマサマ」と言う末社(御釜神社)があり、塩づくりの鉄釜が神宝になっている。土中に塩釜神社の神事に使う鋳物(鋳鉄製)の釜が埋めてある。(日本では鍛鉄が多く珍)日本では砂鉄精錬の鍛鉄が多かったが、奥州は鉄鉱石を用いた中国と同じ鋳鉄方式。

○松島

松島は日本三景の一つ。芭蕉の有名な句「松島や ああ松島や 松島や」は塩釜から小舟で島々を巡っている時に松島の美は言い古されたものだが中世の歌枕の地を思いやり、松の姿、緑、自然に感動している様子が「おくのほそ道の松島くんだり」に記されている。余りの感動の為その日は俳句もできず眠れなかったとことを示す一句。あとの二景は、天ノ橋立と安芸の宮島である。

○瑞巖寺

臨済宗の名刹で、正宗が京の大工匠をよんで桃山風に仕立てた江戸初期の建造物。開基は最澄の弟子の円仁で境内には霊気があり、老杉多く洞窟も多い。円仁は関東の出身で開基の寺は「平泉の中尊寺・毛越寺」、「出羽の立石寺」、

「松島の瑞巖寺」がある。以下に有名な松尾芭蕉の俳句を列記；

瑞巖寺：「松島や、ああ松島や、松島や」

毛越寺：「夏草や兵どもが夢の跡」

中尊寺：「五月雨の降りのこしてや光堂」

立石寺：「閑笠や岩にしみ入る蟬の声」

○石巻

北上川が北から南に貫流する河口に牡鹿半島に抱かれた石巻湾(仙台湾)がある。石巻は江戸時代の廻船(千石船)の出入りする奥州第一の商港であった。北上川は全長247km、流域面積は全国4位。水源は岩手県二戸郡の西岳、盛岡を経由して花巻に。その後、北上、水沢、平泉を経て宮城県の仙北平野を南流して桃生の追波湾で太平洋にでるが最終手前のこの地は古来大反乱を繰り返してきた。其れを、正宗が近江の蒲生郡で毛利家浪人の「河村孫兵衛」を見出し河川を改修させて河口を「追波湾」から「石巻湾」へ付け替えさせて仙北大平原(穀倉地帯)を築造。

㊹秋田

○象潟(きさがた)

象潟の後背・鳥海山は活発な火山で平安時代噴火の溶岩流で九十九島が形成。松尾芭蕉は2人の先人(西行法師・能因法師)の後を追って象潟を訪れている。された。芭蕉が訪問した後、象潟地震により、海底が2.4mも隆起した為、現在は陸地化している。松尾芭蕉「象潟や雨に西施が合歡の花」(奥のほそみち)：当時は象潟が海であった。象潟の島々の中に能因島がある。平安中期の歌人能因法師が3年間島に滞在した事に因む。能因法師「世の中はかくても経けり象潟の海士の苦屋をわが宿にして」(後捨遺集)源平争乱期に西行法師(1118～90)は2度も奥羽の旅をしている(吾妻鏡)西行法師「象潟や桜の波にうづもれて花の上こぐあまの釣り船」小林一茶「象潟や島がくれ行刈穂船」1789年

○蛸満寺(かんまんじ)

平安初期、円仁の創建と言われる。芭蕉は能因島から船で訪れている。現在は象潟地震による隆起で歩いて訪問できる。鎌倉時代北條時頼が滞留している。

㊴津軽(青森・岩手・秋田)

○津軽地方

津軽の地名は日本書紀の斉明紀5(659)年始めて登場。当時、青森県を外ヶ浜と呼ぶ。津軽地方(青森県)は縄文時代(先史時代1万年～2千年前)は狩猟生活に適した食料に恵まれた豊かな地域だった。ところが弥生時代以降の農耕時代に入ってから、飢饉に苦しむ東北のイメージが現在までも強く残る。秀吉以降、凶作が60回以上(1回/5年)あった。それでも、鎌倉時代までは北海道から見れば、青森県はまほろばの国だった？894年遣唐使が廃止されて、平安時代は漢文をベースに和 문화が大いに流行った。特に李白、王維・・・など唐詩の西域詩心の和風版として「陸奥を天地と連想」とする風潮が詩の世界で進み、見た事もない東北の地名、植生(宮城野の萩)、産業(塩釜)が歌枕として流行した。(宮城の名取川、多賀城の末の松山丘、安積の沼、安達の弓木・・・)

○陸奥国

7世紀大化改新の頃、今の福島・宮城・岩手・青森の4県を総称して陸奥(1国)と呼ぶ。当初、道奥国であったが、大宝律令(701)制定によって「陸奥」になった。多賀城碑文によれば、720年頃、鎮守府将軍・大野東人の時、多賀城が建立された。平安末期、西行が陸奥へ旅し、江戸中期には松尾芭蕉が「おくのほそ道」で旅した。

○南部藩

陸奥は広大なため、今の岩手県から青森県東部の地域を南部と呼んだ。山梨県甲斐国の南部三郎光行が12世紀(源頼朝の奥州征伐)～13世紀頃(鎌倉時代)に奥州の地に来て南北朝時代に南朝に属して奥州に南部氏ありと知られた事により奥州全般を支配していた。

○津軽藩

津軽氏は元々、山地にいたが、鱒ヶ沢町の種里へ移りやがて麓の大浦城に出た。その後、弘前市内の堀越城に移動し、最後に津軽平野のど真ん中の弘前城に進出。津軽藩は秀吉の小田原城(北條氏)攻めの頃、1590年成立し、明治4(1871)まで存続。5年に一度のやませ飢饉はあるが、江戸時代中期には実高30万石、10万石の大名藩。津軽氏は鎌倉時代に外ヶ浜で炭焼きをしていた。

南北朝・室町時代は南部氏の下で苦勞を強いられた。室町時代に西津軽の鰯ヶ沢の港を押さえて、岩木山東麓に大浦城を築いて大浦氏と称していたが、戦国時代に為信と言う人材が出て南部氏の津軽鎮所を攻めて津軽一円を平定。秀吉の時代に津軽三郡を得て、大浦姓から津軽姓に改名し弘前に居城を築く。

○青森県誕生

青森県は津軽地方と南部地方があり、荒蕪の地・下北とから成る。明治政府は「江戸時代に犬猿の仲であった東半分・旧南部藩領と西半分・旧津軽藩領」と更に「下北半島・旧斗南藩領」の3者を強引に纏めて行政区画として、明治4年に青森県を設置した。

○弘前城

弘前城は日本七名城の一つと言われる。この優美な近世城が津軽に出現したことは奇跡に近い。築城が開始されたのは、津軽為信の時代で関ヶ原の3年後慶長8(1603)年のことで、築城時には5層の天守閣が聳えていたが江戸初期に消失した。城の正面の大手門(追手門)は二階建、門を入ると三の丸、二の丸へと続く。二の丸には三層の隅櫓が建つ。その先堀を渡ると本丸へ。城内は七つの城塞より成り立つ。3層の本丸からは背景の岩木山が一際冴える。北郭(北の丸)には亀甲門、堀の水、石垣、松の緑がある。亀甲門の門外には重要文化財の民家もある。

○鰯ヶ沢

鰯ヶ沢の地名は戦国時代に現われる。戦国の武将・津軽為信が秀吉に会うべく南部勢の陸路を避けて西方への窓口として、荒海に流され松前まで逆行したが鰯ヶ沢港を利用した。この港は、日本海航路の藩営の外港で、津軽米は弘前平野から鰯ヶ沢港へ運ばれ、天下の台所である大坂コメ市場へと搬送された。現在はハマナスの花の咲く所として有名である。

○岩木山

弘前城から鰯ヶ沢の風景に欠かせないものは何と言っても岩木山である。東北の富士山と言われるこの山の麓一帯は縄文時代の遺跡が多い。岩木山の採集・狩猟の宝庫の貝沢集落、更に縄文遺跡として裸森・中沼・手白と続く。大森の大石神社一帯も縄文遺跡に満ちている。作家、太宰治が生まれた金木町は津軽半島付け根にあり岩木山を望む。

○環状列石(ストーンサークル)

騎馬民族スキタイ系遺跡である「ストーンサークル」が東北に見られることも青森の特徴である。スキタイ風の青銅器・鉄器・深鉢の黒色土器などが出土している。(大森勝山遺跡)。欧州では大西洋沿岸に、極東では南シベリアのエニセイ川流域のミシンスクで遺跡が見られるので肅慎・匈奴によって、日本の北海道と東北に伝搬されたと考えらる。具体的には大森勝山遺跡・秋田鹿角の大湯遺跡などあげられる。約50m×40mの楕円形の敷地内に77組の粗石や集石をめぐらしている。ストーンサークルの内外でリン酸含有量が異なることから共同墓地遺跡ではないかとの説が有力。

○亀ヶ岡遺跡

三内丸山遺跡から2千年以上後の縄文遺跡。江戸時代、三河出身の菅江真澄「外浜奇勝」に「堂の前」と言う地名の地面から土器が出るとの記述に基づき、掘ってみると二十基の土壙墓が発見された。木造駅舎正面には遮光器土偶を模したプラスチックの巨大土偶がある。横綱旭富士の出身地木造町にある縄文遺跡で独特の縄文土器と土偶で有名。亀ヶ岡は標高15m～20mで南北に連なる海岸砂丘屏風山の一つの丘である。得体の知れない甕が出土する事から古くから甕ヶ岡と呼ばれていた。木造町は古代、低湿地の湖・潟で魚介が豊かで縄文生活に適した津軽湖に位置する。亀ヶ岡文化と称される縄文晩期の土器は魚・獣・クミ・トチの実を煮て食べる道具でガラス玉・骨・角で装飾されていた。中でも眼窩が誇張された遮光器土偶は有名である。両眼の表現がイヌイットが雪原で使う遮光器に似ていることから遮光器土偶と呼ばれる。木造町の縄文博物館としてカルコ(縄文住居展示館)がある。

○十三港(とさみなと・じゅうさんこ)

鰯ヶ沢から北の津軽西海岸は砂浜で七里長浜と言われ汀線の行き着く所が十三港。十三湖は地質学想像上の湖で岩木川など諸川が流れ込む津軽湖の残欠と思われる。この港について文献が少ないが鎌倉末期の「十三往来」、室町期「廻船式目」が残る。平安時代に始めて現れ、安藤氏が支配した14～15世紀が最盛期であったようです。その後、南部氏の支配となり、十三港の繁栄も終わりを告げた。江戸時代「菅江真澄」が十三湖を訪れた日記が残る

丘上から十三湖が見えたかも。但し、最盛期の中世都市は砂の下に埋もれており、1991からの発掘調査で解明された。

○三内丸山

1994年7月16日「青森県で4500年前の巨大木柱出土」と言う新聞記事がある。場所は青森郊外の三内丸山で多数の竪穴住居と倉庫らしき高床建物が数十棟。楼閣跡と思しき巨大な柱穴が六個、柱の大きさは薬師寺三重の塔の柱に匹敵する。弥生時代遺跡「九州の吉野ヶ里」より2千年以上古い縄文時代の高さ20M以上の望楼。現地にはその建物が復元されている。江戸時代・菅江真澄(1796)が花見に訪れた頃丸山は桜の名所で内山内。小三内・大三内と広がる地域。出土柱は表面加工が施された刳材。出土した土器破片は段ボール箱数万個。女性像の土偶、共同墓地、クジラ・タイ・ヒラメ等海産物、瓢箪・ワトコの種子、翡翠等。

○八甲田山

西方岩木山と並ぶ名山で青森市民には欠かせない山である。火山噴火により八つの隆起ができたことで八甲田山と呼ばれる。明治時代、日露戦争に備えて弘前第八師団の青森歩兵五連帯が八甲田山で雪中行軍で猛吹雪に会い199人の凍死者を出した世界最大の遭難事件で有名。

○棟方志功

青森市松原に「棟方志功記念館」がある。生誕地は青森市善知鳥(うとう)、外ヶ浜に住む伝説の鳥。青森市内の鍛冶屋の息子として生まれた。棟方志功は自伝の「極道坂」で、東北の風：弘前の風は北斎ばり、青森の風は歌舞伎絵風、五所川原の風は能風と言う。無学の志功は日本美学論の創始者・柳宗悦、陶芸家浜田庄司・河井寛二郎から学ぶ。有名な作品は昭和14の大和し美し～華厳譜～善知鳥(特選)～釈迦十大弟子(世界)

○下北半島

下北は夏でもやませと言う冷風が吹き、稲は育ちにくい。但し南部馬の名馬の産地である。野辺地町堺川が津軽(平内町)と南部(馬門)の藩境で大きな饅頭形の塚が両岸にある。下北半島は8割が森林で南部藩植樹のアスノの木が多いが、鉄器となる砂鉄が取れた。この地に明治維新後(M3)、会津藩2800戸(約14000人)が流罪で移住し斗南藩と称す。旧会津藩は食料窮状の中、藩校日新館を設けた。田名部が砂鉄精錬の地で農具を生産。江戸期の文化人類学者とも言うべき菅江真澄も下北半島で2～3年住みつき調査をした。陸奥湾は大阪廻船が出入りして上方との結びつきが強く田名部の夏祭りは京風である。

◇東北人物史

東北人は怜れで独創性に卓越し、名利が無くて優秀な人材が多い。

陸羯南(1857～1907) 青森県

明治の言論人、新聞「日本」の主催者、政治を論じながら不偏不党。正岡子規の生活保護者

原敬(1856～1921) 岩手県

明治の言論人、大正7年(1918)政党内閣首相で平民宰相と呼ばれた。戊辰戦争で、朝敵とされた南部人との思いがあった。

高橋是清(1854～1936) 宮城県

財政家で、財政手腕を買われて昭和2年の大恐慌時(S2)に大蔵大臣を歴任。おしくも2.26事件で暗殺された。

狩野亨吉(1865～1942) 秋田県

明治期の知識人、第1高等学校校長から京都帝大文科学部長となる。江戸中期の思想家で無名の安藤昌益を発掘。(珍分カンブンの文脈を読み取る)

内藤湖南(1866～1934) 秋田県

明治の新聞論説者、M40、狩野亨吉(コウキチ)の推薦で京都帝大教授となる。東洋学の権威で邪馬台国畿内説の先駆者。漢学を人文科学的な学問に大成。江戸の人文思想家「富永仲基」を発掘。

米内光政(1880～) 海軍軍人

田中館愛橘 物理学者

金田一京助 言語学者

石坂洋次郎(1900～1986) 弘前

小説家、「若い人」、この時代では健全な常識人

葛西善蔵(1887～1928) 津軽

私小説、破滅型・生活破綻者であるが東北の作家にとって芸術上の聖者？。人生の破綻が芸術への出発点

太宰治(1909～2048) 津軽